

もっと実際に即した教育を

山田：ところで、文部省のやり方には、ことあるごとに反対する日教組ですが、こと授業内容に関するかぎり、文部省の指導するカリキュラム通りですね。

石井：本当にそうですね。私なんか十四年間小学校の現場で、文部省の教育は間違っているとこいつづけてきましたからね、日教組が当然賛成して一緒にやってくれると思ったら、ぜんぜんやる気配がない。ぜんぜん見向きもしない。

山田：そういう点おかしいですね。

石井：文部省のやる政治的、資格的なものには反対するという意見はあるんですね。ところが、教科内容になるとまったく言われた通りです。

山田：特に特殊児を持つ親とすれば、日教組はもっと実際に即した教育をして欲しいんですが……。

石井：井深大さんのやっている幼児開発協会の教室を私がやっていたころですがね。そこでわずかに一週間に一時間、精薄の子

供の指導をしたことがあります。ご存知の通り、精薄児と言いますと、死んだような鈍い目をしています。輝きがないわけです。ところが八か月くらいで、目がキラキラと輝くような子供になった。

この子は今六年生くらいになっているだろうと思いますが。学校の成績は、いま普通児として中以上の成績をあげています。やっぱり早く教育方法を見つけて、早く漢字をうんと読めるようにしてやることですね。これをすれば、私は精薄児だって普通児以上の、むしろいい成績をあげることができるようになると思っています。

大脳生理学の時実利彦先生がおっしゃっていますように、三千元のカメラだから十万元のカメラに劣るとは限らないわけですよ。十万元のカメラだって使い方の研究をしなければ、いい写真が撮れるはずがないんでしてね。三千元のカメラだって絶対に悲観することはないと、私は本当にそう思いますね。

だから、早くから漢字教育をほどこすことによって、頭を使うように仕向ければ、子供自身はその喜びを感じますから、生き生きとしてきて、グングン伸びるようになります。井深さんがこういう幼児

教育に熱心になったのも、やはり、お子さんのことにあるんじゃないかと思います。うちの子だってもっと早く気がついて手を打ってれば、もう少し何とかなっていたんじゃないか、という思いがあるんじゃないか。それが幼児教育に、あのような熱意をもっていらっしゃる理由ではないか、と。

山田： 私も一生懸命宣伝いたします。

石井： 私はクラスを持つと、すぐに親を集めて約束してもらうことがあるんです。それは石井は日本で一番いい先生だと心から信じてもらいたい、ということです。親が信じれば、子供はかならず信ずる。信ずれば、かならず教育の効果があがる。それはね、私は一生懸命にやるつもりだけれど、やはり人間ですから欠点もあるし、不満もある。それに人間というのはタデ食う虫も好き好きで、どんなにいいことをしたつもりでも、気に食わん、いやなヤツだと、こう思うこともあるだろう。しかしそう思ったら、教育というものは決して成功しない。だからどんなに不満であろうとも、この石井は立派な先生だと心から思って、間違っても子供の前で、私の批判がましいことだけは言ってくれるなと。

山田： それは大事なことです。

石井： だから、小学校や幼稚園の先生方にもこれを奨めるんです。それをやらなかったら、いくら一生懸命に子供を指導をしたって、逆効果を招く恐れがある。だからかならずそれだけは親に注文つけておきなさい。そして教育をやれば効果が上がる。意外なくらい先生方というのは、親と協力しようという気持がない。むしろ親を敬遠したり、軽蔑的な感情を持っている。

山田： この節は、先生方も母親に負担をかけすぎるんですよ。

石井： そういう面もありますね。つまり自分がすべきことを、親のように要求するんですね。それは大変な間違いです。

山田： 宿題を能力以上に出すんで、ぼくは、怒ったんですよ。宿題は親がしちゃう、あの子たちは、やりやしないというんですよ。

石井： 学科の指導は教師の責任です。できないときには、できるように教師が最善を尽す。できないから、親に助けを乞う。これでは逆で、教師としてこれほど恥ずべき行為はない。

「お宅の子は算数が不得意だから注意して下さい」なんて言うことですが、私はこういう通信簿なんていうものは、百害あって一利も

ない。と思っています。家庭との連絡簿にしたって、書き方がみんな逆だと思います。自分のすべきことを、親にするように要求するんですから。教師は教育の専門家です。教師の教師たるゆえんは、算数をできるようにしてやるとか、国語をできるようにしてやるとかということであって、それができないから、親に助けを乞うのはいけません。親にだってできるんだったら、何も学校はいらないわけです。ところが教師はそういう要求をするんですよね。

山田： もう一ついけないと思うのは、これは特殊学級の場合なんですけど、母親なんかがよくついて行くでしょう、教室に入れているんですよ。いかんと思うんですよ。ぼくは、家庭をシャットアウトして、その中で教師が責任をもって教えることが教室なんだと。何でも親がついていくと入れてしまう。子供の前でやったってだめなんだと言うんですよ。子供も親を意識して。教室では親なんかシャットアウトする、授業参観は別として、シャットアウトしてやれと言うんですが、なかなかそれが実行されないですね。

石井： とにかく親も教師も、よほど考えなおさなければいけないこと

がたくさんありますね。